

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.13 令和3年11月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター

〒760-8521 高松市幸町1-1

Tel 087-832-1151～1154

Fax 087-832-1155

<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 第68回中国・四国地区大学教育研究会報告…………… 1
2. 遠隔授業・DRIのためのFD報告…………… 6
3. よりよい授業のためのFDワークショップ報告…………… 8
4. FDスキルアップ講座報告…………… 10
5. 授業公開から学ぶ遠隔授業のコツ…………… 13
6. 新スタッフからの一言…………… 15
7. 退任のご挨拶…………… 16

1. 第 68 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

中国・四国地区大学教育研究会が、令和 3 年 5 月 29 日に開催されました。この研究会は、大学等での教養教育を主題的に扱うもので、今年で 68 回目となります。2 年ぶりに、オンラインでの開催となった今回は、メインテーマ「オンラインによる教養教育」のもとで、シンポジウム及び分科会が執り行われました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

■シンポジウム

シンポジウムの枠では、奥田一雄氏（高知大学学長特別補佐）による「オンライン時代のデータサイエンス教育」、Jussi Välimaa 氏（フィンランド国立教育研究所所長、ユバスキュラ大学 教育学教授）による「フィンランドにおけるオンライン授業について」という二つの講演が行われました。私が知る限り、この研究会で外国人研究者を招聘することは初めてのことです。オンライン実施という特別な状況を活かした高知大学のアイデアには、膝を打つ思いでした。前者の主旨は、なぜ今、数理・データサイエンス (DS)・AI の教育が必要なのか、という問題を、文部科学省のヴィジョンをふまえて説明するというものでした。質疑応答の際に、DS 教育という共通の枠組みが推奨されるなかで大学の個性をどう出すのか、という問いがあり、それに対して奥田氏は「具体的なコンテンツのなかで、個性を出していく可能性がある」というコメントがありました。今後、地方国立大学の存在意義を示すためのポイントであるように思われます。後者では、フィンランドのオンライン教育の現状や、オンライン教育を受ける側、使う側の状況が、詳細なデータとともに紹介されました。Välimaa 氏も、対面コミュニケーションの重要性を説いており、この点は国を問わず不変であることが再確認できました。（文責：佐藤慶太）

■人文・社会科学分科会

多様な学問分野から構成される「共通教育の文系科目」では、どのようなオンライン授業がなされ、そこからどのような成果や課題が見えてきたのか。人文・社会科学分科会では、四つの事例報告をもとに現状を認識し、対応の糸口を検討しました。第一報告の岩城裕之先生（高知大学教育学部准教授）からは、「共通教育人文分野教員のオンライン授業総括」と題して、オンライン授業を実施した教員を対象としたアンケート結果が報告されました。第二報告の北崎勇帆先生（高知大学人文社会科学部講師）からは、「代替としてのオンラインと道具としてのオンラインー日本語史の科目を事例にー」と題して、感染症の拡大如何にかかわらず今後も一つの道具として活用できるようなオンライン授業のあり方が報告されました。第三報告の井上次夫先生（高知県立大学文化学部教授）からは、「初年次

教育科目「基礎演習」のオンライン授業ーハイブリッド型ブレンドからの学び」と題して、ハイブリッド型ブレンドタイプの特徴と実施にあたって留意するポイントが報告されました。第四報告の石筒寛先生（高知大学地域協働学部准教授）からは、「実践型授業におけるオンライン授業の可能性 ～「土佐の海の環境学」の事例」と題して、高知県西部に位置する柏島を舞台として、自然環境や地域社会の課題と解決策を考える海洋教育の授業の事例が報告されました。急な対応を余儀なくされたオンライン授業でしたが、そこにも積極的な面をみいだそうとする報告者の姿が印象的な分科会でした。（文責：西本佳代）

■自然科学分科会

今年の自然科学分科会は、教養教育における自然科学の授業の特性から、「非専門分野の学生が自然科学の基本的な知識・技能を習得し、自然科学に関心を持つようにできる」ようにするための工夫について交流するとともに、新型コロナウイルスの影響を反映して、「オンラインで実施されたので、その辺りの苦労や工夫について」の情報交換を主眼として行われました。1つ目の報告は、自然科学分野における研究内容を、「その発見が身の回りのどのようなことに役立っているのか」を示すことによって学生の興味を喚起しようとする授業の紹介がありました。2つ目の報告は、裁判員制度を念頭に置いて、科学捜査を題材として自然科学的なものの見方をとりあげているユニークな授業の紹介もありました。3つ目の報告は、確率論上の例題として知られる「モンティ・ホール問題」を取りあげ、学生に考えさせる授業を展開しているものでありました。特に、遠隔で実施する上での課題も取り上げられました。

これら 3 つの具体的な授業を題材とすることで、自然に参加者の共通の問題意識の交流ができたように思います。いずれも専門的な知識を教授する前に、テーマで興味を持たせ、そのうえで授業を受講してもらう工夫をするもので、文系学生が理系の授業を受講しない問題への対策を進めてきた本学の共通教育改革と重なり合う部分があると感じました。本学でも多かれ少なかれこうした工夫をしている授業が大半であると思います。あまり構えずにこのような工夫の交流ができる機会を作れると有益だと感じました。（文責：寺尾徹）

■情報教育分科会

本年度の情報教育分科会においては、「コロナ禍の情報教育と DS 教育」をメインテーマとし、「コロナ禍における高知大学の情報教育と DS 教育」佐々木 正人先生（高知大学 学術情報基盤図書館 准教授）、及び「香川大学の数理・データサイエンス教育」藤澤 修平先生（香川大学 大学教育基盤センター 特命助教）の発表が行われました。

佐々木先生の発表では、高知大学での新入生に対して講義開始までに習得すべき 66 項目の紹介があり、講義開始時には学生が基礎的スキルの習得が完了しているので、学生も教員も講義の内容に集中できるという報告がありました。

藤澤先生の発表では、香川大学の数理・データサイエンス教育の基礎となる「情報リテラシーB」の授業設計および実践結果等の紹介がありました。本講義はベネッセとの共同研究により人的・時間的コストを低減したデータサイエンスコンテンツを提供しているだけでなく、数理・データサイエンスを活用した香川県の地域活性化事例等、学生にとって身近に興味・関心を引きやすい分野を提供する事で、受講生がDS教育の学習に高いモチベーションを持つようになった等の報告もありました。

上記の発表から、初年次の情報教育の工夫や、DS教育におけるオンラインの可能性等の情報が共有でき、今後の新たな情報教育の可能性を示唆する分科会となりました。(文責：宮崎英一)

■外国語（英語）分科会

本年度の外国語（英語）分科会は、外国語（初修）と合同での分科会でした。

英語の発表は、高知大学人文社会科学部講師の Sean William Burgoine 先生による「Challenges of Communicative English Teaching in an Online Environment」と、広島大学外国語教育研究センター准教授の森田光宏先生による「コロナ禍の言語教育—広島大学におけるオンデマンド型授業英語の実践—」でした。高知大では共通教育科目「英会話」がネイティブ教員によって行われていますが、2020年度は急遽 Moodle と Teams を併用したオンライン講義を行わざるを得ず、当初は困難の連続であったそうです。しかし教員のツールへの熟達と工夫により、徐々に学生とのコミュニケーションもスムーズになり、満足度が上がったとの報告がありました。広島大では「外国語教育研究センター」が設置されており、コロナ禍でセンター担当教員が1年生の英語必修科目を非同期（オンデマンド）型オンライン学習支援システム「Blackboard」を用いて行った授業が報告されました。各週の授業は「確認テスト」「予習チェック」「解説動画視聴」「リーディング音声聴取」「理解度チェック」「振り返りテスト」などのようにモジュール化されており、成績や出席の管理を効率的に行えるよう工夫されているとのことでした。教員に過大な負担をかけずにオンライン授業で望まれる細かなフィードバックを与えるには、学習支援システムの適切な利用が欠かせないと指摘がありました。香川大学の共通科目英語でも2020年度は急遽センター教員による Moodle 共通コースの作成を余儀なくされましたが、試験作成のコツなど、今後も参考になる有意義な情報が得られた発表でした。(文責：長井克己)

■外国語（初修）分科会

「コロナ禍でのドイツ語教育」「オンラインにおける語学授業の筆記試験について」という題目で、高知大学の2名の教授が報告されました。

斎藤教授はドイツ語の授業の実例を紹介されました。大学の開講方針に従って、急に対面やオンラインの切り替えに対応するのに追われ、またその際非常勤講師に遠隔授業の方

法を伝達するのに要する困難などは、昨年度香川大学でも発生した事柄でした。高知のドイツ語の場合、遠隔でもオンデマンド形式が取られたことは、香川大学と異なる所で、動画作成に時間がかかり取られたということでした。

高橋教授は遠隔での試験について取り上げられました。2019年の対面形式の試験に比べ、遠隔で試験を行った2020年に全体的に大きく得点が上昇しました。確証はないものの、想定されるのは機械翻訳利用、試験時間中に解答がLineで出回るなどが考えられます。対策として、使用単語を授業内の単語に限定する、試験時間中のカメラオン、試験時間の短縮、会話のみの試験とする、テストを複数作成など考えられる方法が提示されましたが、手間、学習効果など様々な面でマイナス点も指摘できるということでした。

今回の発表では、遠隔授業について、いずれの発表者もどちらかというところ積極的に評価する立場でありましたが、全体的にはやはり対面を良しとする教員が多いようです。その例として、今年ドイツ語の授業を対面・遠隔いずれでも可とされたとき、発表者以外はすべて対面授業を選択したということも紹介されました。

試験の方式、体制の整備や、学生の修得状況把握の工夫ということが、仮に遠隔に比重を移す場合は避けて通れない問題であることが再確認されました。(文責：高橋明郎)

■日本語・日本事情分科会

本分科会のテーマは、「地域社会との交流・連携による国際共修型授業の教育効果」でした。以下のような事例・実践報告がなされ、コロナ禍での学び・活動をいかに有意義にするかという各機関の誠意を見ることができ、いずれも単なるコロナ対応を超えた取り組みでした。

- 1 岡山大学における日本事情と国際共修授業の実践報告 (宇塚 万里子、岡山大学 教授)
大きな時代の流れの中で日本事情を位置づけていました。正規生を主な対象とする本学における「日本事情」とは異なり、日本語能力等を要求していない等、スーパーグローバル大学として取り組まれていた影響が大きい体制でした。
- 2 香川大学における共修科目事例：全学共通科目「プロジェクトさぬき」
(高水 徹、香川大学 准教授・塩井 実香、香川大学 准教授)
全学共通科目「プロジェクトさぬき」についての報告を行いました。本授業はアクティブラーニング型科目であり、2020年度のコロナ禍において、ICTを高度に活用して課題解決型のグループ発表を実践した事例を提示しました。
- 3 鳥取大学のオンラインを利用した国際交流の取り組み (蕪木 絵実、鳥取大学 助教)
異文化交流の場をいかにオンラインで作り上げていくか、という趣旨の発表でしたが、この「交流」相手には県内企業も含まれており、就職関連の内容も扱われていました。さらに、地道な広報活動(主としてインスタグラム)にも取り組まれていました。
- 4 徳島大学における日本事情の取り組みーデジタルファシリテーションのアプローチ (Gehrtz 三隅 友子、徳島大学 教授)

従来は主要な内容としている祭り自体の体験が全くできない中、留学生・日本人学生以外にも、高校生、地域の住民、自治体をオンラインでつないで、学びの場を作っていました。

- 5 体験学習を通じた留学生と日本人学生の国際共修授業ー地域との互惠関係の構築を目指した主体的、互恵的な学びの促進と異文化理解マインドの深化ー（林 翠芳、高知大学 教授・大塚 薫、高知大学 准教授）

「地域文化理解」の紹介で、本発表および『高知大学留学生教育』によれば、本授業は対話を重視した科目であり、直接的対話がかなわない状況において、オンラインでの交流を実践していました。

- 6 協定校間遠隔日本語ピア・ラーニング授業の構築ー日韓中台の学生を繋ぐ主体的な学びの場の形成ー（大塚 薫、高知大学 准教授・林 翠芳、高知大学 教授）

元々協定校と Skype や LINE、Teams 等を活用した遠隔授業を実施していたところに、チューターとして日本人学生（日本語教育副専攻）を加え、双方にとって意義の大きな環境を構築していました。（文責：高水 徹）

2. 遠隔授業・DRIのためのFD報告

- 講義名：安全で確実なハイブリッド型授業の実施に関するFD
- 日時：令和3年4月30日（月）16:20～17:50
- 開催方法：対面及び遠隔の併用
 - 対面：幸町南キャンパス総合教育棟第11講義室
 - 遠隔：Zoom及びTeams（開催後に香川大学Moodleでオンデマンド配信）
- 講師：岡田徹太郎（経済学部教授/大学教育基盤センター地域教育部長）
- 参加者：当日参加84名、オンデマンドでの参加44名

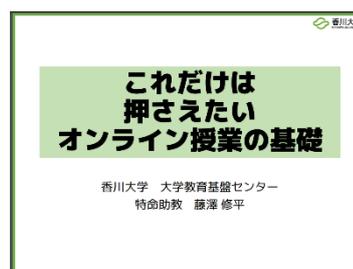
本講座は(1)リアルタイム・オンライン（ZoomおよびTeams）、(2)対面（総合教育棟（DRI棟））、(3)オンデマンド・オンラインで開講されたハイブリッド型FDの3形態で開講されました。ここでは、対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド型授業を「安全」かつ「確実」に行う方法、教室内の対面学生と、遠隔学生がほぼ同じ授業を受けられるような、機器の配置と設定方法、遠隔授業で欠けがちな学生との双方向性をつける方法を目標としています。本講座では講義中の実践に即したセットアップや、対面グループワークの新しい取り組み等、これからのハイブリッド講義の方向性を示唆する内容が示されました。本講座で学んだ事は、受講者ご自身のこれからのハイブリッド講義の実施に大いに役立つでしょう。（文責：宮崎英一）

- 講義名：教室マイクを使って遠隔+対面授業を行う
- 日時：令和3年5月10日（月）～6月7日（月）
- 開催方法：オンライン開催（香川大学Moodleでのオンデマンド配信）
- 講師：青木高明（教育学部准教授）
- 参加者：67名

本講義はコロナウイルスの影響下のもと、完全オンデマンド配信で行われました。このため、受講者の方はご自分の都合の良い時間に視聴したり、繰り返し見たりする事でより理解度が深まったと思います。講義に際しては、本学の実際の教室内の音響機器の端子の写真まご準備頂きました。よって、本講義の配布資料は、即ハイブリッド講義のマニュアルとして活用できるような作りになっており、大学の教室からハイブリッド講義を行おうとする先生方には非常に役立つ内容になっておりました。本講義の受講は、これからハイブリッド講義を行おうとする先生方にとっては、最初を踏み出す一助になると実感しました。（文責：宮崎英一）



- 講義名：これだけは押さえないオンライン授業の基礎
- 日時：令和3年11月4日（木）14:40～16:10
- 開催方法：オンライン開催（Zoom）
- 講師：藤澤修平（大学教育基盤センター）
- 参加者：42名



2020年以降、全国の大学でICT技術を用いたオンライン授業が急速に普及・発展しました。本学においても、いち早く環境に適応し授業をこなした教員、手探りでLMSやビデオ通話システムの使い方を学び、辛うじて授業をこなした教員、様々な方がいらっしゃるかと思います。

本FDでは、オンライン授業の基礎的な知識を学びます。オンライン授業について一から学びなおしたい方だけでなく、既に持っている知識を点検し、不足部分を補う目的の方にも受講頂きました。FDでは単なるソフトウェアやハードウェアの紹介に留まらず、講義に直ぐにでも利用できる様々なヒント等をご提示頂きました。

本FDを受講した方は、授業の内容に応じて適切な教授方法やアプリケーションを選択することが出来るようになり、対面講義と組み合わせたハイブリッド型講義の構築の準備、もし新型コロナウイルス第6波が起こったとしても、直ちに対応する事が可能になるでしょう。（文責：宮崎英一）

- 講義名：これだけは押さえないTeamsの基礎
- 日時：令和3年11月5日（金）14:40～16:10
- 開催方法：オンライン開催（Teams）
- 講師：小坂有資、藤澤修平（大学教育基盤センター）
- 参加者：56名



2021年の今となつては、オンライン授業は特別な講義形式ではなく、状況に応じた講義形式の1つになっています。本FDでは、Teamsに関する基礎的な知識や特徴の紹介、これを活用した授業の実践事例の紹介等により、1) Microsoft Teamsの特徴を説明することができる、2) Microsoft Teamsを使った授業の実施方法を説明することができる、という2つの到達目標の修得を目指しました。

実施されたFDでは、1) 藤澤先生のTeams基礎紹介、2) 小坂先生のTeamsを活用した実践授業紹介、3) 藤澤先生のTeams基礎+という、基礎から応用までの幅広い内容で実施されました。このため、受講者の方は、自分が講義で利用する目的に応じた内容でFDを受講する事ができ、今後の自分の講義にTeams取り入れる具体的なイメージまで得られたと思います。本FDで得た知見が、対面講義と組み合わせる講義の構築だけでなく、今後の様々な講義まで発展させる事が期待出来るでしょう。（文責：宮崎英一）

3. よりよい授業のための FD ワークショップ報告

日時：令和3年9月7日（火）～8日（水）

場所：香川大学幸町北キャンパス オリーブスクエア 2階多目的ホール

第12回「よりよい授業のためのFDワークショップ」が、令和3年9月7日（火）～8日（水）に、香川大学幸町北キャンパスのオリーブスクエア2階多目的ホールで開催されました。本ワークショップは平成22年より毎年開催されており、本学大学教育基盤センターの教員が講師を務めています。今回の参加者は、14名（香川大学13名、香川県立保健医療大学1名）でした。ワークショップは、昨年度と同様に、新型コロナウイルス感染症対策を行い、対面で実施されました。



■プログラム概要 ※GW=グループワーク

1日目（研修は8:50～17:50）

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイク
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・講義 III「よりよい学習評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」

2日目（研修は8:50～15:30）

- ・ふりかえり
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表」
- ・閉会式

ワークショップの目的は、授業を担当するにあたって必要となる基礎的な知識と技術を学ぶことでした。具体的には、授業の構想・設計・実施・評価に関わる一連の過程をグループ作業として体験し、参加者相互の話し合いを経てそれに関する能力を身につけることでした。

ワークショップのプログラム概要は左の通りです。昨年度と同様に、参加者は全員パソコンを持参し、Microsoft Teams などを使いながら、全学共通科目の開発に取り組みました。各グループで、シラバス、授業計画、パワーポイント資料を作成し、発表を行いました。これを作成するにあたり、対面授業だけを想定するのではなく、遠隔授業になった場合はどのように対処するかといったことも、あたりまえのこととして意識されていました。

このように今回のワークショップでも、対面授業と遠隔授業の両方を想定した技術やツールについて学ぶことができ、それらを全学共通科目の開発に取り入れることができました。

大学教育基盤センターの教員の方々と、修学支援グループの職員の方々との協力のおかげで、今年度も無事に、実りあるワークショップを開催することができました。来年度も本

ワークショップが、対面や遠隔などの様々な授業方法を体験しながら学ぶことができる貴重な学びの場になることを願っております。(文責：小坂有資)



4. FD スキルアップ講座報告

*今年度より、例年開講されている FD スキルアップ講座は写真のみの報告といたします。
新規開講講座「Zoom 百物語、授業や会議がさらにパワーアップ」の報告につきましては、
次ページをご覧ください。

■講座名：「充実させよう！アクティブラーニング型授業」

■日 時：令和3年9月16日（木）14:40～16:10

■場 所：幸町北キャンパス 525 講義室

■講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）



■講座名：「充実させよう！アクティブラーニング型授業－話し合い・教え合いの技法－」

■日 時：令和3年9月16日（木）16:20～17:50

■場 所：幸町北キャンパス 525 講義室

■講 師：佐藤慶太（大学教育基盤センター准教授）



■講座名：「充実させよう！アクティブラーニング型授業－図解・文章作成の技法－」

■日 時：令和3年9月17日（金）13:00～14:30

■場 所：幸町北キャンパス 525 講義室

■講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）



■講座名：「充実させよう！アクティブラーニング型授業－問題解決の技法－」

■日 時：令和3年9月17日（金）14:40～16:10

■場 所：幸町北キャンパス 525 講義室

■講 師：三宅岳史（教育学部教授）



■講座名：「事例から学ぶ問題発見・解決型授業のコツ」

■日 時：令和3年9月17日（金）16:20～17:50

■場 所：幸町北キャンパス 525 講義室

■講 師：小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）



- 講義名：「Zoom 百物語、授業や会議がさらにパワーアップ」
- 日 時：令和3年9月16日（木）13:00～14:30
- 場 所：オンライン開催(Zoom)
- 講 師：石井 知彦（創造工学部）

本講座は、Web 会議システムの一つである Zoom の、より効果的な利用方法を解説する講座です。新型コロナウイルス感染症のまん延により、大学では遠隔による授業や会議の必要性が高まりました。すでに多くの方が Zoom を使っていますが、基本的な操作にとどまっているという人も多く、改めて初歩から高度な操作方法までを身に付け、今以上に授業や会議が円滑に運ぶことができるようにという目的でこの講座を開設しました。

講座では、まず Zoom をホストとして利用する際の「心構え」について説明がありました。遠隔であるからこそ、より細やかなコミュニケーションスキルが必要であり、例えば、参加者の表情を見ることができるよう可能な限りビデオをオンにしておくことや、ホストの身振りは大きく分かり易くすることなど、心理的な効果について解説されました。

次に、より円滑で効果的に進めるために、適切なカメラの位置や照明、参加者への反応用の札の準備依頼、Zoom 中であることのドア提示の方法など、具体的な提案がありました。

さらに、実際の Zoom の機能である、バーチャル背景やビデオフィルターの設定、さらに参加者同士が顔を見えないようにするフォーカスモードの利用方法などの説明がありました。

また、iPad の板書やアプリを PC 画面として取り込みスクリーン全体を画面共有する方法や、ギャラリービューを別のモニターで常時表示する方法、参加者側の PC 画面をモニターできるように複数のカメラや PC を設定する方法など、高度なテクニックについての提案がありました。

最後に、マイクやカメラ、挙手のオン・オフをボタン一つで行える Stream Deck や、反応を視覚的に強調する mmhmm の使い方などの説明がありました。

様々な機能の Web 上での設定の仕方や、スマホと連動した使い方など、初心者には難しいと思えることも分かり易く説明され、実際の仕事や生活で生かせることが学べる講座でした。（文責：ウィリアムズ厚子）

■今後のスキルアップ講座の予定

学生の学びを促すシラバスの書き方	1月6日(木) 10:30~12:00 幸町北キャンパス 523 講義室
基礎から学ぶ学習評価法	1月6日(木) 13:00~14:30 幸町北キャンパス 523 講義室
学生参加型授業の技法	1月6日(木) 14:40~16:10 幸町北キャンパス 523 講義室
シラバス・授業を改善しよう!	1月7日(金) 10:00~15:00 幸町北キャンパス 523 講義室
事例から学ぶ授業外学修促進のコツ	1月7日(金) 15:30~17:00 幸町北キャンパス 523 講義室
「アカデミック・スキル」をどう教えるか	3月8日(火) 13:00~15:10 幸町北キャンパス 523 講義室

※開催方法等は今後変更する可能性があります。

※大学教育基盤センター主催 FD の一覧は、センターの HP で公開されています。

[香川大学大学教育基盤センター: FD 情報](#)

5. 授業公開から学ぶ遠隔授業のコツ

前期期間中に、FDの一環として3つの遠隔配信型授業の公開を行いました。以下では、公開された授業のうち2つについて、内容とともに、参観した大教センター主担当教員が「これは使える！」と膝を打ったポイント（方法やツールなど）を紹介していきます。

■授業科目名：大学入門ゼミ M (2)「感染症と感染制御」

■日 時：令和3年6月7日（月）～6月15日（火）

■場 所：オンライン開催（香川大学 Moodle での動画公開）

■担当教員：坂東修二（医学部）

■内 容：

「大学入門ゼミ」は、大学での学習に必要な基本スキル“アカデミックリテラシー”の養成を目的とし、医学部では7つのコースを開講しています。

今回公開する「感染症と感染制御」では、講義日程の前半で主に「共通コンテンツ」を扱い、その後、より専門的な内容に関する講義を行います。公開授業(5/12日収録)は、「共通コンテンツ」の日本語技法（2回目）です。

今年度の医学部「大学入門ゼミ」は、大学の指針に基づき、5月からは講義収録を配信する形で行っています。そのためグループワークの部分では、学生個人に問題を考えさせて、その後に解説するという方式を取っています。今回の講義を通じて、学習の基礎となる日本語技法の習熟に繋がることを願っています。（授業公開の告知文より）

■この公開授業で学んだ遠隔授業のコツ：

1. 学習内容と今後の学びの関連付け

今回の授業では、日本語技法のうち「比較・対照」、「箇条書き」、「要約」が取り扱われていました。特に印象的だったのは、学習している内容と医学研究との関連づけが意識的に行われているところでした。たとえば「比較・対照」ならば、実験を例にして、こういった技法の習得が必要であること、「箇条書き」ならば、それが学会でのプレゼンテーションで重要になってくることが強調されています。アカデミックスキル教育は、（実際はそうではないのですが）高校の学習の延長のように見えてしまうことがあり、学生が「何で今更こんなことを」と思って、真剣に取り組めない場合があります。本授業のような徹底した意識づけがやはり重要であると、改めて感じました。

2. 一時停止機能をつかった作業時間の確保

今回はオンデマンド教材を使っただけの授業でした。オンデマンド教材を作る場合、学生の作業時間をどのように確保するか、が一つの課題となります。この授業では、講義途中に一時停止をして作業をするよう促しがなされています。この方法であれば、学生自身のレディネス、ペースに合わせて作業時間を確保することができます。オンデマンド教材の利点を生か

した優れた方法と言えます。作成に当たって労力が少なく、すぐにでも取り入れられる方法という点も魅力です。(文責：佐藤慶太)

■授業科目名：物理学 D「文系のための物理学」

■日 時：令和 3 年 6 月 21 日（月）～6 月 29 日（火）

■場 所：オンライン開催（香川大学 Moodle）

■担当教員：高橋 尚志（教育学部 教授・公開授業担当）

笠 潤平（教育学部 教授）

■内 容：「アクティブ・ラーニングで力学をする」

今年度の授業公開は、物理学 D「文系のための物理学」に依頼しました。その理由は次の二点です。

- 1) 文系学生向けの理系科目として：全学共通科目においては、理系学生向けはもちろんのこと、文系学生向けの理系科目もさらに充実させることが求められており、その参考にさせていただければと思います。
- 2) ハイブリッド型授業として：物理学 D では、実験の授業を対面とオンラインで同時に実施しており、その工夫を参考にさせていただければと思います。

(授業公開の告知文より)

■この公開授業で学んだ遠隔授業のコツ：

1. ハイブリッド型授業のための機材

本授業では、実験の授業を対面とオンラインで同時に実施しました。その際に用いられたのは、ノートパソコン、スイッチャー、書画カメラ、ビデオカメラ、タブレット、の 5 点です。授業の様子はノートパソコン（Zoom）で配信・録画されています。そのノートパソコンにスイッチャーをつなぎ、書画カメラ、ビデオカメラ、の映像を切り替えます。タブレットは、配信・録画されている映像を受信してプロジェクターに投影するために使います。教室で受講している学生はプロジェクターを通して、自宅等で受講している学生は各々のデバイスを通して、同じ映像を視聴することができます。

2. 書画カメラの利用

書画カメラは教員の手元の作業を映し出します。本授業では、力学台車（スマートカート）を用いて実験しましたので、その台車や計測結果を表示するタブレットの利用の仕方を書画カメラの映像で説明しました。また、計測結果を手書きでグラフ化する際も、書画カメラで映しました。

3. ビデオカメラの利用と TA の配置

教室では、グループにわかれて実験が行われました。その実験の様子を TA がビデオカメラを使って撮影しました。教員が机間巡視している間は、ビデオカメラの様子が配信・録画されています。(文責：西本佳代)

6. 新スタッフからの一言

大学教育基盤センター 特命講師 Billa David Guillaume



令和3年10月1日付けで、大学教育基盤センターの英語特命講師に着任しましたビラ・ダビッドと申します。

香川大学では2016年4月より英語特命講師として勤めておりました。その5年間は学生の英語コミュニケーション力向上を目指し **Communicative English** の担当のほか、グローバル・カフェにて教鞭をとっておりました。私にとってこの5年間は大変充実した日々であり、また今学期より特命講師として大学で勤務できますことを大変嬉しく思っております。香川大学の学生の英語力向上と質の高いグローバル人材育成を目指し、今後も力を尽くしてまいります。

出身地はフランスで米国在住の経験を経て、今では香川在住10年目となります。さまざまな異文化体験を持つことで公私共に知的好奇心に素晴らしい刺激を受けております。

今後ともどうぞよろしく願いいたします。

7. 退任のご挨拶

大学教育基盤センター 准教授 葛城 浩一



2006年1月に着任してからはや16年が経ちました。私は、共通教育部・調査研究部付き専任教員2人のうちの1人として採用されました。前職が研究職で、いわゆる「現場」ははじめてでしたので、もう1人の専任教員に教えを請いながらぼちぼち慣れていけばいいかな、ぐらいの甘い考えを当初は持っていました。それが着任早々、もう1人の専任教員が3ヶ月後にはいなくなることを知り、「ぼちぼち慣れていけばいい」どころの話ではないことを知って啞然としました。さらには、着任2ヶ月ほどにもかかわらず、「現代GP」にエントリーするためのメインライターを任されることになり、幸いにも(?)採択されましたので、センターの業務に加え、この事業まで「メインで」やらなくてはいけませんでした。もう1人の専任教員は、2006年4月に着任したものの、3年で異動され、後任の佐藤さんの着任までは半年空きました。そのため、その後の「学生支援GP」事業やSPOD事業などの新規事業にも「メインで」かかわらなくてはならず、着任してからの4年ほどは本当に大変な毎日を送りました。しかし今になって思えば、こうした「厳しい環境」がセンター教員としての私だけでなく、大学教員としての私を鍛えてくれたのだと思います。

さてその後、佐藤さんが2009年10月に着任し、私の肩の荷もぐっと減ったのですが、私は油断していませんでした。というのも、佐藤さんも前任と同様、そのうち異動してしまうのではないかと危惧していたからです。香川大学に骨をうずめる気だった私は、テレビドラマ『相棒』でいうところの水谷豊演じる杉下右京の立ち位置で、定年までに何人「相棒」を変えることになるのかなあと、そう明るくない未来を予想しておりました。しかし、そうした予想は幸いにも外れ、今に至るまで佐藤さんは私の「相棒」でいてくれます。さらに予想外に、センター組織の改編によって専任教員ポストが増えたことで、西本さんも新たな「相棒」となりました。この度、私が香川大学を去り、神戸大学に異動することになりましたので、私の『相棒』物語はここで終わります。これからは、佐藤さん、西本さん、そして私の後任をメインキャストとした新たな物語が新たに紡がれていくこととなります。さてどんな物語が展開されていくのか、一読者として楽しみにしています。

最後になりましたが、これまで支えていただいた教職員のみなさま方には大変感謝しております。私なき後のセンター及び香川大学のさらなる繁栄を皆様にと託しますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。